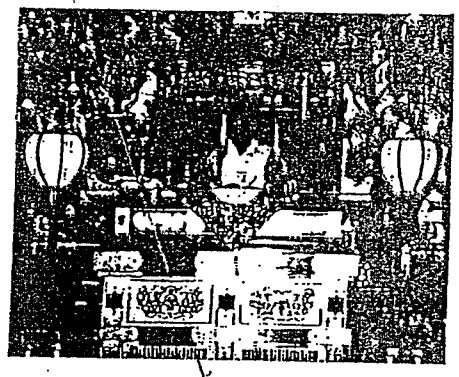
血脈論

霊宝虫払大法会
御法主日顕上人猊下御説法
三大秘法抄



S62.4.6日　於御影堂

血脈相承

仏法が、師から弟子へと相承されていくことを、「親から子へ」と血統が受け継がれていく姿、あるいは、大動脈から毛細血管へと血液が流れ通っていく姿に例えて、血脈相承といいます（相承とは、師と弟子とが相向かい合って相承されることを意味します）。

この血脈相承には、唯授一人の血脈相承と、信心の血脈相承という、二つがあります。

まず、唯授一人の血脈相承とは、師が、数多の弟子の中から、もっとも資質の勝れた方をただ一人選び、仏法の極理を授け与えられるもので、これによって仏法は断絶することなく後世に正しく伝わっていくのです。

日蓮大聖人におかれては、御弟子の中から日興上人御一人を選ばれ、御自身の悟られた甚深の法のすべてを頒り与えられ、大聖人御入滅後の後継者と定められました。そして、日興上人は日目上人に、日目上人は日道上人にと、あたかも一器の水を一器に移すがごとく、大聖人の仏法のすべては、御歴代上人方に相承されて、今日まで日蓮正宗第六十六代日顕上人に伝えられてきたのであります。

次に、信心の血脈相承とは、信心によって、私共大衆にも頂戴できる血脈で、唯授一人の血脈相承を大動脈とすれば、毛細血管にあたるべきものです。

すなわち「唯授一人で仏法の極理を相承してこられた御法主上人を仰いで信心し、そこを通じて御本尊を拝し奉るところに、はじめて大聖人の御意に適った正しい信心ができ、御本尊の仏の生命を我が胸中に頂戴できるのであります」。これを信心の血脈相承というのであります。

唯授一人の血脈と信心の血脈とは、その立て分けが厳然としており、唯授一人の血脈を根本・大前提として、はじめて後来たる信心の血脈が流れることを忘れてはなりません。

一「法華講員の基礎知識」より抜粋

小川文通

正百対

かの六老僧中、日興上人を除く五人までは個人投与の本尊が残されていますが、日興上人に対しては個人投与の本尊は全く残されておりません。すなわち、それは存在しないのであります。

その理由は、大聖人、日興上人が唯我与我一体の御境界にわたらせ給い、その上から一期御化導の中心根幹をなす、末法万年の一切衆生救済に関する大事な御本尊を広宣流布のために日興上人に委ねられたからであります。

しからば、「その唯我与我一体の御境地の因ってきたる所以は何か」といえば、『生死一大事血脈抄』に

「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」（全集一三三八㌻）

と仰せの如く、日興上人がよく大聖人の出世の本懐たる本門三大秘法の深義における法体について、質直にして柔軟、一心に末法下種の本仏の教詔を拝されたからであります。

信心の血脈によって凝りなく大聖人の究竟の御境智を拝し、その智水の全分をことごとくお受けあそばされたからであります。

（中略）

故に『血脈相承とは、信心の血脈がその基をなすのであり、その信心の血脈によって仏の本地甚深の境智に基づく法体法門の血脈が、一器より一器へ流れ通うのであります。日興上人が大聖人に信心の血脈を通じて即身成仏の大法を承継された如く、日興上人の弟子檀那僧俗は、日興上人に信伏随従して大法についての信心の血脈を得、師弟不二の境地に至って成仏の本懐を遂げられたのであります。

また、日興上人より日目上人、日道上人と縦に付嘱される血脈は、その時代時代における僧俗一同と化儀化法において一体の信解に住し、魔障を払い邪義を破し、正法の令法久住と興隆に努めるとともに、それぞれ下種成仏の本懐を得られたのであります。

しかるに、宗祖大聖人より日興上人への血脈相承を否定する者達の言として、宗祖の法門は一切に通ずる信心の血脈が大事であり、もし唯授一人血脈相承なるものが別にあるなら成仏の道は貫主一人だけに限ることになり、一般の僧俗に通じない偏狭なものであるとの批判がありますが、これは信心の血脈の何たるかに迷う偏見であります。

したがって、この主張は信心の血脈について明らかに二つの誤りを犯しております。法華大法の信心の血脈には、縦に甚深の義と、横に広大の義が同時に具わっております。甚深の義については、『宗祖大聖人の甚深の寿量文底の法体に至るまでの一切の仏法を受けきるところの信心の血脈あって、初めて真実の仏道が伝承されるのであります。また、広大の義については、この信心の血脈はけっして法主一人でなく、正義を伝承する僧俗一切が、その信条、法門について一体の信心を保ち、化儀の実践をなすところ、法水相通じて信解得道全く等しく、無量の民衆が即身成仏の本懐を得るのであります。

故に、大聖人より日興上人への唯授一人の血脈を否定する者は、信心の血脈における甚深の義に背く者であり、また、日興一人のみの偏狭な血脈と謗る者は、信心の血脈が一切を包容し、十界皆成する広大の義に盲目であることが指摘されます。

実に日興上人は、法門法体に関する大聖人仏法の一切を、信心の血脈を根底とする信解をもって如実に伝承あそばすとともに、常随給仕のかたわら、末法万年の広布の実相について大聖人の御物語を拝承された故に、重々の相伝と御本尊伝承が拝される所以であります。

（中略）

しかして、この久遠元初の三宝が末法に出現し、宗祖大聖人より日興上人へ唯授一人の付嘱をあそばすことこそ、久遠即末法の義において全く久遠元初の結要付嘱であり、三世常住にその法体は不変であります。故にまた、その意を含んで「同意」といわれるのであります。したがって

「日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり云云」（同一六〇〇㌻）

の文こそ、末法弘通の一切の法門法体の深義を束ねて日興上人に付嘱あそばすとともに、本門弘通の大導師たる任を委ねられ、師資の血脈を示し給うのであります。

『この唯授一人の血脈も、その基本的本質は前来述べる如く信心の血脈に存します』かの五老等の人々は、この宗祖弘法の根本に対し一而不二の境地に至るべき信心の血脈が通じなかったために、宗祖本懐の法門について正理に契合せず、したがって、極意の相伝を受けられた日興上人に同心なしえなかったのであります。しかるに、末法万年の衆生救済の仏法においては、僧俗を問わず、この根本の一器より一器への相伝に対する信解が確立するところ、即身成仏の大法とその利益は縦横無尽に開花し、顕現するのであります。

『いわゆる、信解抜群にして宗祖二祖の信心の血脈を疑わず、勇猛精進するところ、僧にあれ、俗にあれ、僧から僧へ、また俗から俗へ、さらに広くその信心の血脈を伝えつつ展転して衆生を利益することが下種仏法の相であります。

その一大実証は、近年、正法の日本ないし世界広布の礎を開かれた、創価学会における初代、二代、三代等の会長の方々における信心の血脈の伝承であります』その指導による広布の大前進において、有智も無智も男女を嫌わず、妙法の実践をもって真の勝妙の境を得、仏国土の建設と、世界平和に貢献する活動の実証において、深く広くその意義と功徳が顕れております。この信心の血脈は、古来よりの法華講の信心の歴史においてもまた多く見ることができます。

要するに『日蓮日興唯授一人の相伝血脈は、その信心において万人に通ずるのであり、かかる信心の血脈が正法の僧俗一切の行学の根底であります』故に、大聖人より日興上人への血脈が貫主一人しか解らぬ独断的、偏見的な仏法などというのは血脈の真義を解せぬ者の囈言であり、信心の一念に法水が流れるところ、有智、無智を問わず、万人のために即身成仏の功徳が実証として開かれているのであります。